人文論叢（三重大学）第22号　2005

# 談話理解モデルからみた日本語名詞句の解釈について

吉　田　悦　子

**要旨**　日本語の自然発話において名詞句が連続して生起するパターンは普通に観察される現象である。本稿では、日本語の照応表現のタイプとして、裸名詞句、指示形容詞句、指示代名詞、ゼロ代名詞をとりあげ、話題の中心を担う日本語名詞句の意味機能について検討する。談話理解のためのモデルを利用して話題の中心になる可能性を探るとともに、談話単位内だけにとどまらず、談話単位を越えて話題の中心が継続している現象について考察する。そして、名詞句の機能を背景で支える発話状況と談話記憶に目を向け、自然発話において話題の継続性を担う指示表現はゼロ代名詞よりはむしろ名詞句が中心であり、その連鎖が談話の整合性と有機的に結びついていることを指摘する。さらに指示形容詞句のうち「ソノ形容詞句」については、裸名詞とは異なる談話領域を探索して話題の中心になるものを焦点化する機能があり、認知的な解釈を加えていくことが有効であることを明らかにする。

## 0．はじめに

日本語の自然発話において名詞句が連続して生起するパターンは普通に観察される現象である。こうした名詞句の連鎖はいったん代名詞（ゼロ代名詞）化されても再び名詞句が出現して談話の話題として定着するという特徴があり、従来の連辞的な照応関係の法則からは予測することができない。本稿ではこうした日本語名詞句に焦点をあてて、「センタリング」「キャッシュ」「プッシュ」「リターンポップ」と呼ばれる計算言語学の談話理解モデルにおける概念によって、その意味機能を談話構造の階層性と結びつけて説明することを試みる。そして、名詞句の機能を背景で支える発話状況と談話記憶に目を向けて、自然発話において話題の継続性を担う指示表現はゼロ代名詞よりはむしろ名詞句が中心であり、その連鎖が談話の整合性と有機的に結びついていることを指摘する。

## 1．日英語の指示表現と談話に関する先行研究

文が単語から階層的に構成されるのと同じように、談話も発話から階層的に構成され、談話構造と呼ばれている。指示表現と談話構造の関係に注目した研究は、近年着実に発展してきている。とりわけ、興味深いのは、談話における指示表現の選択と解釈がどのように談話構造によって制約をうけているのかという問題に関して、談話単位内部の局所的な結束性だけではなく、談話単位をこえた談話の大局的な整合性をも射程に入れた談話理解モデルや認知的解釈が、従来の照応の解釈の見直しや新たな解釈を生み出している点である。[1] こうした研究の背景についてまず概観したい。

### 1.1　背景

日本語の照応研究の中心は主語の省略やゼロ代名詞の生起について圧倒的に多く、指示表現と談話構造とのかかわりに注目した研究はきわめて少ない。同様に英語の照応に関する理論的研究は代名詞化にかかわる問題として文法論の中で議論される一方で、名詞句や指示詞の分布や話題、談話とのかかわりについては、語用論や談話文法の領域として扱われ、照応形の形式的な側面と機能的な側面とは異なる専門領域で別々に扱われてきた印象がある。後者の領域において、談話における指示表現の分布と選択に関する研究（Prince 1981, Gundel et al. 1993）や、指示を情報構造、話題の継続性からとらえようとした研究（Givon 1983 a, b; Chafe 1987, 1994）が後続の研究に与えた影響は大きいが、日英語の指示表現の形式的な差が意味的にはどのように対応するのかについて、その動機付けや体系的な説明は未だ十分解明されているとはいえない。

たとえば、日英語の指示表現を比較した Clancy（1980）では、非明示的指示表現（代名詞や省略形）の大部分は語り手の指示対象に対する認知的側面を反映しており、指示対象が談話内の話題の焦点として十分に認知されていることを示している、とされる。一方、明示的指示表現（名詞句）の出現は話題の転換、視点の変化、曖昧性の排除、対人的関係などの談話的側面を反映していることを示している、といわれている（Clancy 1980)。しかし、こうした指示表現の違いが談話の結束性や整合性にどのように貢献しているかという問題に対しては十分に納得のいく説明がまだ与えられていない。

このような流れの中で名詞句が談話において果たす役割に焦点を当てた重要な研究に目を向けたい。Yule（1981）は英語において新規要素が話題として確立し、いったん代名詞化された後、再び名詞化される現象をとり上げ、談話における名詞句の意味機能を指摘している。坂原（2000）は、談話における日英語の名詞句の振る舞いには共通した現象が認められることを指摘し、日本語の裸名詞と英語の定冠詞句、また日英語の指示形容詞句とをそれぞれ比較して認知意味論の視点からその意味機能における類似性を主張している。[2] Obana（2003）では、日本語の談話において、話題の継続性に貢献しているのはゼロ代名詞ではなく名詞句であることに注目し、従来の指示をめぐる見解への見直しを議論している。このうち、Obana（2003）における主張は興味深く、ゼロ代名詞と名詞句、3 人称代名詞が談話の異なる局面において選択される事実を指摘し、詳細な談話の観察をもとにその動機付けを探っている。本稿ではこの Obana（2003）における主張である名詞句と話題の継続性という点に焦点を当てて、自然な発話を収集した対話的談話においてもこの考察が指示の一般的現象として果たしてあてはまるものかどうかについて検討を加えたい。

### 1.2　日本語名詞句の形式と意味の対応関係

日本語の照応表現のタイプには、裸名詞句、指示形容詞句、ゼロ代名詞がある。これらの形式がどのような意味機能をもち、談話においてどんなふるまいをするのかについての見解を述べておきたい。

Prince（1981）の familiarity scale に基づいて Gundel, Hedberg, and Zacharski（1993）は Givenness Hierarchy（GH）とよばれる認知モデルを提示し、「認知状態」のスケールに 5 ヶ国語の指示表現を対応させている。このうち日本語は以下のようなスケール上に位置づけられ、英語との対応関係が推測される。[3]

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| In | | | | | | uniquely | | | | | | type |
| focus | > | activated | > | familiar | > | identifiable | > | referential | > | | | identifiable |
| English | {it} | that / this / this N | | {that N} | | {the N} | | {indefinite this N} | | | | {a N} |
| Japanese | $\phi$ | kare 'he' | | ano N 'that N' | | | | | | | | |
| kore 'this' | | | | | | ----------$\phi$ N---------- | | | | | | |
| | | sore 'that' | | | | | | | | | | |
| | | are 'that' | | | | | | | | | | |
| kono N 'this N' | | | | | | | | | | | | |
| sono N 'that N' | | | | | | | | | | | | |

英語の弱形である無強勢の代名詞は、日本語のゼロ代名詞に相当する。日本語は定形、不定形を持たず、冠詞による区別がないので、認知的意味上の3点は同じ形式である裸名詞によってカバーされる。したがって裸名詞はこの3つの意味状態のいずれかに相当することになる：type identifiable（英語の不定冠詞句），referential（英語の不定形の this N），uniquely identifiable（英語の定冠詞句）．では裸名詞という同じ形式を意味機能上区別することはどのようにして可能になるのか。形態上の区別を手がかりにすれば、裸名詞句は主格標示の「ガ」がつくと、不定名詞句となり、主題標示「ハ」がつくと定形名詞句に対応するとみなすことができる。しかしながら、この対応は基本となるもので、標示の意味機能はコンテクストによって変化したり、異なる標示形式を伴う場合もある。[4] 日本語の「コソア」系指示詞についても認知スケールの分布から、「コ・ソ」系は英語の代名詞に近いふるまいをすることが予測されるが、ソ系の指示形は基本的に照応用法であり、近接性に基づく「ア・コ」系とは異なり中立的である。[5] また、日本語の3人称代名詞 'kare'（'he'）は特定のコンテクストに限り用いられることが知られており、中立的な無標の英語の he とは異なるふるまいをすることが指摘されている（Obana 2003）。

したがって、完全な対応関係については考慮すべき問題はあるが、本稿では、坂原（2000）に従い、英語の不定冠詞句と定冠詞句は日本語では裸名詞に、指示形容詞句は「コノ/ソノ/アノ」名詞句に、英語の代名詞は日本語ではゼロ代名詞になることが多い、ということを仮定しておく。英語の it が日本語の「ソレ」にあまり対応しない一方で、英語の指示詞 that は日本語では直示用法の「アレ」や、談話用法の「ソレ」にそれぞれ対応しやすいことが明らかである（高橋：2004）。またデータから判断して日本語の3人称代名詞は出現する可能性がないので、本稿では考慮しない。

## 2．センタリングモデルを利用した分析の方法

センタリングモデルは、照応と談話構造とのかかわりに注目した計算言語学の認知モデルのひとつである。センタリング（'centering'）とは話題の中心になる要素（センター 'center'）と談話における局所的なつながり（談話単位内）を問題にする。センタリングモデルの概要につ

いては石崎・伝（2001）を参照。本稿で利用するのはCfのランキングであるが、談話における局所的なつながりを調べるためにはCbと呼ばれる要素が重要である。CbはGivón（1983a）の定義する「トピック」に相当し、現発話における注意の焦点にあたるものである。言い換えると、Cbとは話し手と聞き手の双方が共有する局所的な話題として現発話において最も顕著な（salient）要素である（Brennan 1998）。そして発話内のすべての要素であるCfのうち、現在の発話の中心となるCbと次の発話の中心になると予測されるCpとの関係が談話の局所的な結束性を判断する重要な決め手となる。つまり、各発話の中には、複数のCfの出現が予測され、その中に一つのCbが存在すると考えられる。

さてこの複数のCfのうちどれが一番発話の中心であるCbになるのかを予測するための尺度がCfランキングと呼ばれるスケールである。発話内の要素CfはCfランキングによって序列化され、このうち最上位に位置する要素がCbの候補になる。このランキングは言語によって微妙に異なる。英語に関しては、以下のように文法機能に基づく序列が提案されている。

(1) subject > object(s) > other

(Grozs, Joshi nd Weinstein, 1995)

一方、日本語に関しては、主題や視点表現など談話的かつ認知的観点を優先させた序列が提案されている。Gundel et al.（1993）の認知スケールでも対応していたように、英語の無強勢の代名詞は日本語のゼロ代名詞に相当するとみなされ、この規則はそのまま日本語のゼロ代名詞として実現される場合に拡張可能であるというのがKameyama（1985）の主張である。

(2) （ゼロ）主題 > 視点 > ガ格 > 二格 > ヲ格 > その他

(Walker, Iida and Cote, 1994)

この序列は、Cf内でランキングが高い要素ほど現在の発話の中心になりやすい傾向があることを示している。つまり、英語では最上位にある主語が中心になりやすく、日本語ではゼロ主題が中心になりやすいということになる。本稿では日本語の照応表現のタイプのうち、裸名詞句、指示形容詞句、指示代名詞、ゼロ代名詞に注目して、このCfランキングとどのように結びついているかについて調べてみることにする。ただし、このランキングのうち「視点」についてはここでは含めない。

さらに、このセンタリングモデルをより現実の発話に即して、指示の局所的なつながりだけではなく大局的なつながりも取り入れる試みとして、近年Walker（1998, 2000）においてキャッシュモデルとよばれる統合型の談話モデルが新たに提唱されている。このモデルでは、談話単位を越えても継続する名詞句の用法がとりあげられているが、なぜ使用されるのかについてはまだ未解明である。[6] ここでは、センタリングという概念に加えて、このキャッシュモデルで利用されている概念のうち、キャッシュ（'cache'）とプッシュ（'push'）、リターンポップ（'return pop'）の3つを導入して、説明する。こうした概念自体はGrosz & Sidner（1986）のスタックモデルにおいてすでに定着しているものである。キャッシュは「短期談話記憶」、プッシュは割り込みによって生じた新たな談話単位（本稿では単に「割り込み」と呼ぶ）、そして、リターンポップは「割り込み」の後に生じる談話単位のことである（本稿では「復帰ポップ」

と呼ぶ。[7] キャッシュモデルの強みは、割り込みの長さと関連させながら、この復帰ポップの始まりに生じる割り込み前の最後の発話をキャッシュの概念を利用することで説明することを可能にした点である。復帰ポップの現象は、自然な対話ではごく普通に観察されるが、談話の整合性と結びつけて説明することで名詞句の意味機能を明らかにしたい。

## 3．分析の結果

日英語の対照研究のための対話コーパスとして利用したデータは、収録の条件や環境をほぼ同一にして作成された「英語名称なし地図課題対話コーパス」〔以後「英語コーパス」〕8 対話分と「日本語名称なし地図課題対話コーパス」〔以後「日本語コーパス」〕8 対話分の計 16 対話である。この全体のデータの中から本稿で考察の対象としたのは、日本語のデータ 1 対話分のみである。日本語データの概要については、吉田（2002）および堀内他（1993）を参照。

日本語の照応表現のうち、裸名詞句、指示形容詞句、指示代名詞、ゼロ代名詞の出現頻度と Cf ランキングとの関係は以下のようになる。

表 1

| Cf ＼ 形式 | 裸名詞 | 指示形容詞句「ソノN」 | 指示代名詞「ソレ」「ソコ」 | ゼロ代名詞 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| Topic「ハ」「ニハ」「デハ」「モ」 | 19（52.8） | 1（2.8） | 3（8.3） | 13（36.1） | 36（100.0） |
| Subject「ガ」 | 22（70.9） | 3（9.7） | 2（6.5） | 4（12.9） | 31（100.0） |
| Object「ヲ」 | 5（62.5） | 3（37.5） | 0（0.0） | 0（0.0） | 8（100.0） |
| Others | 35（74.5） | 7（14.9） | 5（10.6） | 0（0.0） | 47（100.0） |
| 計 | 81（66.4） | 14（11.5） | 10（8.2） | 17（13.9） | 122（100.0） |

（　）は%を示す

裸名詞句は全体の指示表現のうち 66.4%を占めており、すべての Cf ランキングにおいて最も出現頻度が高い。ゼロ代名詞は全体の 13.9%に過ぎないが、すべて主題か主語の位置で用いられている。指示形容詞句、指示代名詞については「ソ」系が中心であり、「ソノN」は複数の Cf で出現していることがわかる。以下、ゼロ代名詞、裸名詞、指示形容詞句の順にそれぞれ考察する。

## 4. 考察

### 4.1　ゼロ代名詞

ゼロ代名詞は話題の中心として定着した談話の要素としてみなされている。対話コーパスにおける出現頻度は予想外に少なく、かつ話題として継続しないまま中断しやすい傾向がある。

(3)
G：で
G：こんどは

G：そのもみのきの〈220〉まみなまみなみとはいかないんですけど
G：したに〈360〉こうどしゃくずれみたいな〈260〉えがありますか
F：[φ] がけみたいなんがあってどしゃくずれっ（{てことで＊すか[?]}）
G：　　＊あ〈390〉あわたしのえにはそのがけのえがないんですね
F：({はい[?]})＋
G：＋ん
G：＊た
F：＊[φ]どうくつとはちがういますよね
G：はい[φ]どうくつとはちょっとちがいま＊す

ゼロ代名詞はコピュラ文のゼロ主題の位置において目標物の位置や状況を確定しようとする表現（「[φ（それは)] がけみたいなんがあってどしゃくずれっ({てことで＊すか [?]})」）が後続する場合、あるいは他の競合する対象と比較する場合「[φ（それは)] どうくつとはちがういますよね」や「[φ（それは)] どうくつとはちょっとちがいます」におけるように、「A は B である」のかどうかを確認する表現が後続する場合に用いられている。[8] ゼロ代名詞の用例の大半は目標物の有無について述べる存在文においてゼロ主題として用いられている。話し手と聞き手の間での短いやりとりの発話（とくに答える側）に限られている：「[φ（こやは)] ないです」；「[φ（どうくつのやまは)] がれきのましたにあります」；「はい [φ（たきは)] きたにあります」ここでは話し手と聞き手が所有する対象は共有されておらず、それぞれが自分の所有するひとつの指示対象に言及しているという特徴がある。ゼロ代名詞・ゼロ主題は話題の確立を示す最上位のランキングでありながら、こうした要素は両者によって共有されている情報ではないので、談話における話題の共有は一時的なものにすぎない。Obana（2003）ではゼロ代名詞の連鎖はいわゆる 'topic chain'（Givon 1983）とは異なるものであり、談話における動的なコンテクストの変化によって容易に中断されやすいものであることを指摘している。また、人間を主語にしている談話データにおいてはゼロ代名詞の連鎖は連続して起こる動作や出来事の進行において特徴的に用いられるという。ただし、その場合競合する要素が当面のコンテクストにおいて存在しない場合に限られる。

### 4.2　名詞句

通常、名詞句は継続して用いられる傾向がある。まず、新要素の導入として主語標示「ガ」を伴って名詞句が導入された後、そのまま繰り返し用いられる。

(4)
F：たきがありますよね
G：あまきたに
G：たき＊
F：　　＊たきさいしょとおってきた
G：［φ（たきは)］なないですね
F：たきじゃ

F：＊いまいるそのなん〈320〉みな＊みにさんせんちさがったと＊ころの
G：＊たき
G：　　＊うん
G：　　＊うんうん

どの「たき」のことかを同定するために、途中で一度ゼロ主題のゼロ代名詞が生じていることを除けば、名詞句が繰り返し話題の中心として用いられている。結局、目標物は両者の間では同定されないのであるが、共有していることを想定しながら継続して用いられている。この談話は、さらに他の要素の導入による割り込みがしばらく続いたあと、再びこの「たき」にもどり、今度は主題標示「ハ」を伴い、話題として定着している。

(5)

| Seg. | U | Sp |
|---|---|---|
| 1 | ( 1) | F：＋えその〈350〉＊えと〈330〉みなみにさがったてん〈370〉＊をまっすぐきたにせんのばしていくとたきは |
| | ( 2) | G：　　＊はは；あいづち<br>G：　　＊うん |
| | ( 1) | F：ひがしにありますかにしにありますか |
| 2 | ( 3) | G：えそのふねから |
| | ( 4) | F：ふねじゃなくていま＊〈210〉さんせんちみなみにさがりましたよね＋ |
| | ( 3) | G：　　＊あいま |
| | ( 4) | G：＋あはいはいはい |
| 3 | ( 5) | F：それって〈240〉＊そのす |
| | ( 6) | G：　　＊はい |
| | ( 7) | G：ほこから |
| | ( 5) | F：そ〈300〉こから＊まきたにあがってせんをひいて |
| | ( 8) | G：　　＊うん |
| | ( 9) | G：うん |
| | (10) | G：＊まきたにあがって |
| 4 | (11) | F：＊たきは〈250〉ひがしにあり＊ますか |
| | (12) | G：　　＊たきは |
| | (13) | F：にしにあり〈200〉ますか |
| | (12) | G：［φ（たきは)］ひがしにあります |

談話単位1で再導入された名詞句「たき」は、後続の2つの談話単位（2と3）の割り込みをはさんで、談話単位4（復帰ポップ）の最初の発話で復帰する。主題標示「ハ」で再導入された要素は、同定表現により継続して用いられ、話題として確立していく過程がみられる。名詞句の継続的使用は 'topic chain' を形成するという Obana（2003）の主張は、対話データにも重なる現象である。しかも割り込みの談話単位によって一時的に中断されても談話単位をまたがって話題の中心は復帰ポップまで引き継がれている。

### 4.3　「ソノ」形容詞句

データから判断する限りでは2つのタイプがある。ひとつは、「ソノ名詞句」が直前に談話に導入された対象を即時に指示する場合である。

(6)

G：したに〈360〉こうどしゃくずれみたいな〈260〉えがありますか

F：［φ］がけみたいなんがあってどしゃくずれっ（{てことで＊すか[?]}）

G：　　＊あ〈390〉あわたしのえには

そのがけのえがないんですね

談話の話題は「どしゃくずれ」としてすでに導入されており、「がけ」は競合する要素としての「どしゃくずれ」と対比的に出現しており、相手の所有する要素を直接指示するために「ソノ形容詞句」が選ばれている。指示形容詞句により言及される要素には本来継続している話題の中心からはずれるものであるという含みがあることと関連があるのかもしれない。もうひとつのタイプは、最初の談話単位の直後に新しい要素として導入された名詞句が次に導入される名詞句の参照点として機能している場合である。

(7)

| Seg.　U | Sp |
|---|---|
| 1　( 1) | G：その |
| | G：かきおえたちてんの |
| | G：みぎにもみのきのえがありますか |
| ( 2) | F：はい |
| ( 3) | G：はい |
| 2　( 4) | G：じゃあもみのきの |
| | G：えの |
| | G：と〈360〉したのひだりはし |
| | G：こみき |
| ( 5) | F：はい |
| ( 4) | G：よりいっせんちまたみなみ |
| | G：のちてんまで〈320〉ななめにせんをひいて |
| ( 6) | F：はい |
| 3　( 7) | F：ほうがくは |
| ( 8) | G：ほうがくはえと＊せんは |
| | F：　　＊ん |
| ( 7) | F：なん＊せいのなんとうですか |
| ( 8) | G：　　＊なんす〈250〉なんとうですねはい |
| ( 9) | F：はい |
| (10) | F：はい |
| 4　(11) | G：で |
| | G：こんどは |
| | G：そのもみのきの〈220〉まみなまみなみとはいかないんですけど |
| (12) | G：したに〈360〉こうどしゃくずれみたいな〈260〉えがありますか |

割り込みの談話単位3の直後、復帰ポップの談話単位4の最初の発話において「ソノ形容詞句」は出現している。「もみのき」はすでに割り込み前の談話単位1において話題として導入されているが、復帰ポップ4においては、新しい要素を導入するための参照点として機能している。いったん割り込み3によって中断されても、短期記憶に保存されている情報はすぐに呼び出し可能である。坂原（2000）は指示形容詞句には焦点化の機能があり、「指示対象にある種の近接性を与え、同定される対象に特別の注意を向けさせるズームアップのような効果」があることを指摘している（227）。この焦点化は、話し手聞き手の双方にとって直接アクセス可能な指

示トリガーとして働き、「そのもみのき」を手がかりにして、「どしゃくずれみたいなえ」へと導く。このように割り込みによっていったんそらされた注意を再び向けさせる働きをもつ指示形容詞「ソノ」は要素を同定するだけではなく、話の流れを変化させる役割がある。このような働きができるのは指示形容詞句の探索領域が狭く、指示対象が複数あっても固定化した対象を探索できるためだと坂原（2000：240）は指摘している。このことは次の例でも観察できる。

(8)

| Seg. | U | Sp |
|---|---|---|
| 1 | ( 1) | F：さっきのもみのきじゃなくて |
| | ( 2) | G：もみのきじゃなくてはっぱのおおきいちょっとみがなってるようなきが |
| | ( 3) | F：かいがんせんのちかくにす＊か |
| | ( 4) | G：　　＊あそうですねかいがんせんのちかくでいいです |
| | ( 5) | F：そこ〈240〉はにはきはないんです＊けど |
| 2 | ( 6) | G：　　＊あ〈220〉はい〈370〉じゃそのかいがんせんの |
| | ( 7) | F：はい |
| | ( 6) | G：えとみぎはしありますよね |
| | ( 8) | G：＊みぎはしの |
| | ( 9) | F：＊はい |
| | ( 8) | G：みぎはし |
| | ( 8) | G：＊かいがんせんのえのみぎはし |
| | (10) | F：＊はい |
| | (11) | G：せんのみぎはしってことですか |
| | | G：い |
| | | F：＊かい |
| | (12) | G：＊あ〈230〉すいません |
| 3 | (13) | G：えと |
| | | G：いまそのかいがんのえがありますよ＊ね |
| | (14) | F：　　＊はい |

ここでは、談話単位のはじまりで出現する「かいがんせん」は、話題の流れを調整しながら後続の談話単位3では話の新しい局面を導入する手がかりをつくっているのではないか。本稿で観察した対話データにおいて話題の流れにからんでくる指示形容詞句は「ソノ N」だけである。このことは「ソノ N」が日本語の「コソア」の系列の中で「コ」や「ア」のもっていない用法を発達させていることを示唆しているとともに、談話内の要素を限定して指示する焦点化の機能を担っているといえる（坂原 2000：245)。

## 5．話題の中心を担う名詞句の継続とその解釈にかかわる問題

それでは、名詞句（裸名詞句とソノ形容詞句）が割り込みによって中断されても復帰ポップで再び出現した場合、瞬時に同定されることがなぜ可能になるのだろうか。ここではこうした現象が生じる動機づけのひとつとして Walker（1998、2000）のあげている二つのヒントを要因としてとり上げ、解釈のきっかけとするにとどめたい。ひとつは「情報的に冗長な発話（informationally redundant utterance, IRU）と名づけられた発話の働きが同定の解釈にかかわっているのではないかという点である。この発話の状況には、1. 代名詞の性・数および動詞の選択制限による先行詞の検索や、2.主記憶に保管された命題が IRU によって明示的に検索され、代名詞の先行詞（英語の場合）や名詞句の同定（英語および日本語）もそれにともなっ

て検索できるという場合がかかわる。これは英語においては復帰ポップに生じる代名詞についても認められるが、ゼロ代名詞では生じてこない。こうした名詞句の反復表現自体が合図句となって話題の連鎖を助けていることは間違いないが、談話の整合性と結びつけてさらに考察する必要があるだろう。もうひとつは、裸名詞が情報を維持するための認知的に最も単純で安定した形式であり、談話の整合性を形成するのに好都合であるといえる点である。自然発話では話題の継続は他の競合する要素の中で進行していくものであり、名詞句の反復は、話し手聞き手双方にとって短期記憶の呼び出しが常に活性化された状態におかれているため、話題の中心として認知されやすいのではないかと考えられる。

## 6．結論

本稿では、日本語の照応表現のタイプとして、裸名詞句、指示形容詞句、指示代名詞、ゼロ代名詞をとりあげ、話題の中心を担う日本語名詞句の意味機能について検討した。センタリングモデルのCfランキングで話題の中心になる可能性を探るとともに、談話単位内だけにとどまらず、談話単位を越えて話題が継続する現象について考察を加え、その要因についてもふれた。

本稿で利用した日本語データは1対話のみであり、複数のデータによる分析を経なければ十分な結果として評価することはできないが、少なくとも今回得られた結果は興味深いものである。指示代名詞については用例が少なかったため考察の対象としなかったが、裸名詞句、指示形容詞句、ゼロ代名詞については、それぞれが談話の異なる側面において談話の整合性に貢献していることが垣間見える結果といえよう。日本語においては、（ゼロ）代名詞よりはむしろ、名詞句（裸名詞）こそが談話の整合性と有機的に結びついていることはまちがいない。つまり、継続して使用され、話題の中心を直接担うのは名詞句であり、談話単位を越えても話題は引き継がれる。ゼロ代名詞は極めて限られた場面での話題の共有しか許さず、しかも中断しやすく、談話単位内でしか生起しない。指示形容詞句は「ソノ形容詞句」についていえば、裸名詞とは異なる談話領域を探索して話題の中心になるものを焦点化していることがわかった。ソ系の指示詞は話題の継続を間接的に支えているような面があり、裸名詞を補完するような形で談話の整合性と深くかかわる言語要素として機能しており、さらに検討する必要がある。

したがって、こうした結果により、これまで漠然と理解されていたような名詞句の出現パターンは、従来の照応の解釈によっては十分に予測できないものであり、談話理解のためのモデルを利用して認知的な解釈を加えていくことが有効である。さらに複数の対話のデータを整理して、本稿で得られた結果と考察のうち、名詞句が話題の中心として維持される現象が対話では無標の現象であること、大局的整合性と階層的な談話構造を射程にいれることで、名詞句が話題の中心となる照応表現は繰り返し談話単位をこえて出現すること、その要因としては反復表現自体が合図句として機能していること、情報量を維持する形式である名詞句の特性と短期記憶が常に活性化されるという心理的な効果により談話の整合性が支えられていること、については今後の検討課題としたい。

## 注

1　discourse segment の和訳としては、「談話節」（田窪他 1999）や「談話単位」（石崎・伝 2001）が採用

されているが、ここでは「談話単位」を採用する。

2 英語名詞句と日本語名詞句との対応関係を意味機能の面から見ると、談話における日英語の名詞句の振る舞いには共通した現象が認められる。たとえば、定表現の典型的な用法は、談話に要素を導入することではなく、談話にすでに導入されている要素を同定することである。日本語では裸名詞が、不定表現、定表現のどちらにも使われる。

(1) a. I ordered a book a month ago and the book finally arrived yesterday.

b. 私は一月前に本を注文したが、本はやっと昨日届いた。

この例は、一個の名詞が同一指示によって要素の同定を可能にしている最も処理の簡単な場合であるが、通常の発話では、談話資源内に複数の名詞が登録され、競合している場合がほとんどである。しかしながら、そのために必ずしも要素の同定が不可能になるわけではない。定冠詞句が与える情報だけで要素の同定ができない場合は、別の情報として、発話状況や談話記憶がかかわっており、談話構造の階層性を射程に入れることで名詞句の連鎖を解釈する手がかりが得られると考えられている。とりわけ興味深いのは、英語の定冠詞句と裸名詞との類似性であり、本論では、論じる余地がないが、以下のような間接照応においてもその対応関係が認められる。

(2) a. I read an interesting book. The author is a good friend of mine.

b. 私は面白い本を読んだ。著者は私の親友だ。　(坂原：2000)

3 「認知状態（cognitive status)」は「決定詞や代名詞の形式が変われば、慣例的に異なる認知状態を示すことになるという主張に基づき、聞き手は指示対象として可能なものを限定することができる」と定義される。(Gundel et al. 1993: 274)

4 主題標示「ハ」を伴う名詞句は「対比的なつながり（'contrastive links'）」を示すことがある（Vallduvi and Engdahl 1996）

5 金水（1999）はア・コ指示詞を「直示」と呼び、ソ指示詞を「非直示」と呼ぶ。

6 本研究の最終的な目標はこの Walker の疑問に対して答えようとするものである。そして談話の整合性という視点から名詞句の意味機能と対話構造の理解のためのセンタリングモデルとのかかわりを結びつけることを意図している。そしてセンタリング理論が（ゼロ）代名詞の使用や代名詞化についての規則や予測の解明だけではなく、人間の認知モデルとしてより妥当で柔軟性に富む談話レベルでの拡張を受け入れる計算モデルであることを実証しようとするものである。

7 用語については伝・石崎（2001）を参照。キャッシュは主記憶よりも限られた容量しかもたないが、対象への参照は瞬時におこなわれ、すぐに呼び出し可能である。Walker（1998）は心理学的知見に基づき、キャッシュの容量を 2, 3 発話ないし 7 命題としている。

8 西山（2003）によるコピュラ文の分類では「倒置同定文」にあたると考えられる。

## References


Brennan, S. E. (1998) 'Centering as a Psychological Resource for Achieving Joint Reference in Spontaneous Discourse'. In M. A. Walker, A. K. Joshi & E. F. Prince (eds.), *Centering Theory in Discourse*. Oxford: Clarendon Press. 227-249.

Chafe, W. (1987) 'Cognitive Constraints on Information Flow'. In R .S. Tomlin (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, Amsterdam: Benjamins. 21-51.

----------. (1994). *Discourse, Consciousness and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: University of Chicago Press.

Clancy, P. M. (1980) "Referential Choice in English and Japanese Narrative Discourse." In Chafe, W. L. (ed.) *The Pear stories*. Norwood: N. J. Ablex. pp. 127-202.

Givon, T. (1983a) 'Topic continuity in discourse: An introduction', in Givon and Ute Language Program, T. (ed) *Topic Continuity in Discouse: A Quantitative Cross-Language Study*.. London: John Benjamins. 1-41.

----------. (1983b). 'Topic continuity in spoken English', in Givon and Ute Language Program, T. (ed) *Topic*

*Continuity in Discouse: A Quantitative Cross-Language Study*.. London: John Benjamins. 343-363.

Gundel, J. K., N. Hedberg and R. Zacharski (1993) "Cognitive status and the form of referring expressions in discourse." *Language*, 69, 2: 274-307.

Grosz, B. J., A. K. Joshi and S. Weinstein (1995) "Centering: A Framework for Modeling the Local Coherence of Discourse." *Computational Linguistics* 21, 2: 203-225.

----------. and C. L. Sidner (1986) "Attentions, Intensions and the Structure of Discourse." *Computational Linguistics*, 12: 175-204.

堀内靖雄，中野有紀子，小磯花絵，石崎雅人，鈴木浩之，岡田美智男，仲真紀子，土屋俊，市川熹（1993）「日本語地図課題対話コーパスの設計と特徴」『人工知能学会誌』Vol.14, No.2, 63-73.

Hurewitz, F. (1998) "A quantitative look at discourse coherence." In Walker M. A., A. K. Joshi and E. Prince (eds.). pp.273-291.

石崎雅人・伝康晴（2001）『談話と対話』東京：東京大学出版会

Kameyama, M. (1985) *Zero anaphora: The case of Japanese*. Unpublished doctoral dissertation, Stanford University.

金水敏（1999）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6 (4): 67-92

西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論』東京：ひつじ書房

Obana, Y. (2003) "Anaphoric choices in Japanese fictional novels: The discourse arrangement of noun phrases, zero and third person pronouns" *Text* 23 (3): 405-443.

Prince, E. (1981) 'Toward a taxonomy of given-new information' In P. Cole (ed), *Radical Pragmatics* New York: Academic Press. 223-56.

坂原茂（2000）「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房 213-249.

高橋英光（2004）「指示詞の理解：英語 it と that (第 2 章)」大堀壽夫編『認知コミュニケーション論』東京：大修館書店

田窪行則，西山佑司，三藤博，亀山恵，片桐恭弘（1999）『談話と文脈』（とくに 3 章を参照）東京：岩波書店

Walker, M., M. Iida and S. Cote (1994) "Japanese Discourse and the Process of Centering." *Computational linguistics* 20: 193-231.

Walker, M. A., A. K. Joshi and E. Prince (eds.) *Centering Theory in Discourse*. Oxford: Clarendon Press.

Walker, M. A., A. K. Joshi and E. Prince (1998) "Centering in Naturally-Occurring Discourse: An Overview." In Walker, M. A., A. K. Joshi and E. Prince (eds.). 1-30.

Walker, M. A. (1998) "Centering, Anaphora Resolution, and Discourse Structure." In Walker, M. A., A. K. Joshi and E. Prince (eds.). 401-436.

Walker, M. A. (2000) 'Toward a Model of the Interaction of Centering with Global Discourse Structure' Verbum.

Valluduvi, E. and E. Engdahl (1996) 'The linguistic realization of information packaging'. *Linguistics* 34. 459-519

吉田悦子（2002）「日本語名称なし地図課題対話コーパスの概要と転記テキストの作成：報告」『人文論叢』第 19 号. 241-249.

Yule, G. (1981). 'new, current and displaced entity reference' *Lingua* (55), 41-52.